空海の風景

上巻

司馬遼太郎

司馬遼太郎

空海の風景

上巻

中央公論社

空海の風景　上巻

昭和五十年十月三十日初　版
昭和五十一年二月十日十二版

著　者　司馬遼太郎
発行者　高　梨　茂
印刷所　株式会社精興社
製本所　小泉製本株式会社
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一―一
電話（五六一）五九二一
振替　東京　二―三四
©一九七五　検印廃止

空海の風景　上巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

僧空海がうまれた讃岐のくにというのは、茅渟の海をへだてて畿内に接している。野がひろく、山がとびきりひくい。野のあちこちに物でも撒いたように円錐形の丘が散在しており、野がひろいせいか、海明かりのする空がひどく開闊に見え、瀬戸内に湧く雲がさまざまに変化して、人の夢想を育てるにはかっこうの自然といえるかもしれない。

「わが父は佐伯氏にして、讃岐国多度郡の人なり。むかし敵毛を征し、班土を被れり」

と、空海自身の作といわれる『御遺告』の第一条に書いてある。東国の毛人の征討に出かけてゆき、その武功によって讃岐に土地をもらった家系である、という。こんにちともなれば疑わしくもあるが、そういう華やかな家系伝説が、空海の生きていた時代には讃岐佐伯氏の家の伝承としてひとびとに語られていたことはたしかである。

しかし空海にとって気の毒なことだが、佐伯氏には二種類ある。

中央にいる佐伯氏は、当時の日本の国家伝承である記紀の世界に登場するところの武門大伴氏

の一派に相違なく、東国の毛人を征したかもしれないが、讃岐の佐伯氏にはそういう典拠がなく、強いて典拠によるとすれば、「征し」どころか、毛人そのものであるということにもなりかねない。

以下、しばらく日本書紀の記述にたよる。

毛人、蝦夷とは単純にアイヌと考えてもよく、あるいはばく然と農耕民に対し、縄文的採集生活をして定着することを欲しない種族と考えてもよい。

「冬は穴に宿、夏は樔に住む。……山に登ること飛ぶ禽の如く、草を行ること走ぐる獣の如し。……箭を頭髻に蔵し、刀を衣の中に佩く。或いは党類をあつめて辺堺を犯す。或いは農桑を伺ひて人民を略む」

と、そのあらあらしげな印象が景行紀にある。その骨格は、弥生式の水稲農耕を神聖で唯一の生産手段と信じているこの列島の西方のひとびととはちがい、貌も扁平でなく、中高で、頭はずっしりとうしろが発達し、丈はひくく言語もちがっていたであろうという想像はゆるされる。

景行紀では、英雄的な王子が征討軍をひきいて東を征し、やがてかれらを多数捕虜にして畿内にもどった。このことは唐突なようだが、空海という天才の成立と無縁ではない。

かれら俘囚たちは、ひとまずは伊勢神宮におかれたが、そのさまは、蝦夷ども、昼夜喧き嘩みて出入礼なし、というさわがしさであった。このため、他に移された。

――御諸山のほとりにさぶらはしむ。

御諸山とは大和の三輪山のことである。この山は大和においてもっとも奇しき神南備山とされるが、これをミモロと呼ぶのは多少のふしぎさがともなう。モロ（山）とは韓語である。水稲農耕は韓土とのつながりのふかい北九州の野で発生し、瀬戸内海をにぎわしつつ畿内でいよいよ盛大になり、この列島の人文を一変させた。蝦夷たちはそういう地を掻く生産手段をもたない。さらには、そういう農耕民族の言葉も解さず、風俗も異にしていたが、それらが多数とらえられて御諸山のほとりにさぶらわしめられたのは、異風の光景という以上に、いたましさをおぼえる。

ところがそこでもかれらは「隣里に叫び呼ひて人民をおびやか」したために、ついに畿内の国国に分住せしめられた。ほかに分けて住まわせられたという国は播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波の五ヵ国で、それらのひとびとが、

「佐伯部の祖なり」

と、景行紀ではいう。要するに、かれらの一部が、空海のうまれた讃岐のくにに分住せしめられた。

人が、異語をつかう場合、騒ぐようにきこえる。佐伯とはさへぎのことだという解き方に自然な感じをおぼえる。

それら五ヵ国に住まわせられた言騒ぐさへぎべは、それぞれ俘囚の長の管理のもとにおかれた。まぎらわしいことだが、その俘囚の長もまた、佐伯氏と称した。中央の佐伯氏とは系列がちがう

のである。中央のそれは古代王朝で武を担当した大伴氏の一派で、諸国の佐伯人の中央における管理をするためにその氏族名をもち、身分は連で、やがて宿禰の姓をもらうという名族である。空海の讃岐佐伯氏とはまるでちがっているのだが、しかし空海の生存した時代にはもはや混同されていたらしい。空海の死の直後、この讃岐佐伯氏は朝廷に運動し、

「私どもは大伴の一族で中央の佐伯氏と同族でありますのに、直の身分でしかありません。ぜひ宿禰の姓をいただきとうございます」

と懇願して、意外なほどのかんたんさで許されている。死後の空海の名声にもよるかもしれないが、たとえ空海が出なくても、空海の時代のこの讃岐佐伯氏はむらがって学才のある者を出し、そこは卑姓階級だけにとびぬけた立身はしなかったにせよ、中央の官界でそこそこに活躍した者が、異様なほどに多かった。そういうひとびとの力が、讃岐佐伯氏の身分昇格のために直接の力になったことはたしかである。

筆者は、空海において、ごくばく然と天才の成立ということを考えている。しかし空海の時代は今ともなれば遠すぎ、霞のかなたにあるようである。すこしでもそれに近づくために、とりあえずかれの環境の中になにか他とは異る条件がなかったかということを、佐伯氏というかぼそい糸口ながらたぐりつづけてみる。あるいはたぐりよせれば、空海の年少のころの顔や手足のうごきが肉眼でみえるだろうか。

われわれは、空海が生れて育った屋敷のあとにゆくことができる。

私は年少のころ、そのあたりの海浜で一夏すごしたために、あの太陽があかるくて雲のかがやきのつよい、そのくせ大和盆地に似てやや古寂びた風景の記憶が、幾枚か鮮明にのこっている。そのころ讃岐の大人たちはよくお大師さんのことを話した。その多くは超人である魔術者としての伝説で、おそらく空海の生存時代よりずっとのちに高野聖や行人たちが創作してひろめたものにちがいない。

空海の伝説といえば、最近、私の知人でどういう場合でも理性をうしないそうにない人文科学者が、話題が空海のことになると、自分は、つまり自分のような讃岐そだちの者にはとても空海を人として論ずることはできない、人以上の存在だと思ったときにはじめて気持が安らいで多少とも空海について語ることができる、と言った。

それを聴いて私は息をわすれるような驚きをおぼえた。その人のその場合の印象は、私が年少のころ讃岐の海岸で接した漁師や農夫たちとすこしもかわらなかった。空海とはなおそのような存在でありつづけているのかとおもうと、この人物を肉眼で見たいという自分の願望が、わずかながらもそらおそろしくおもえたりする。しかしこの世にナマ身で存在した人間が、その死後千数百年を経てもなお半神としてあがめつづけられるというつらさ、もしくは空海の場合、それが自然以上の自然さをもつというのは、どういう機微によるものであろう。

空海の故地へは、たとえば高松を出て予讃線ぞいの国道を西へゆけばよい。この国道が、空海

のうまれた奈良朝末期の官道であったろうということは、沿道に讃岐国の国分尼寺や国分寺跡がそれぞれ低い丘陵を背にし、南面して遺っていることでもわかる。途中、国府のあともある。国分寺の瓦を焼いた窯あとが丘陵の松林にかこまれた民家のもみほし庭のそばにのこっていて、岩肌を鑿りぬいて煙出しまであけられているというその構造はいまでも使えそうである。それら上代国家の地方施設の跡はすべて高松西郊の国分寺・府中盆地に集中している。空海の故地はさらに西へゆかねばならない。府中から国道を離れ、左へ折れてせまい県道をとると、道は古街道めかしくなり、丘陵のあいだを心もとなげに通っている。あちこちに饅頭を置いたような丘陵と丘陵のあいだの窪みにはたいてい青い水が潜んでいて、そのつどの空の色をたたえている。

池の多いことは讃岐へ来るたれものおどろきのひとつであるにちがいない。古代国家は国家や社会の基礎が水稲で成立していた。農耕が昇華して宗教になったり、ときには強烈な正義になったりした。正義といえば非農耕民を農耕化させて田畑に定着させることと、池をうがつことが政治の正義であり、最大の事業でもあった。大和にも和泉にも池が多い。しかしそれにもまして讃岐には池が多い。すでに空海のうまれたころにはこんにちの池のほとんどが存在した。空海のころ、讃岐国は畿内の先進地帯におとらぬほどの人口を養っていたといわれるのは、この池の数を見てもわかることである。これだけの池をたれが掘ったのか、というせんさくはよけいなことだが、しかし伝承の解答は鮮烈である。多くは空海が掘ったという。伝承の空海は実在の空海にひどく得をさせているようである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この旧官道を西へゆく途中、この夷(たい)らな土地にはめずらしく峠があって、峠という呼称がこっけいな感じがする。峠の斜面には孟宗竹がうえられ、筍の畑になっているのが、こんにち風であった。そのあたりにも傾斜を堰(せ)きとめて古池があり、塘(つつみ)の草だけが年々の色をしていた。人影のない塘に脚のみじかい犬が二ひきのぼっていて、一ぴきが塘の草に背中をこすりつけて、ずり落ちてはまた登っていた。犬のこういう動作ばかりは空海のころとかわらず、空海がこの道をあるいていてこの犬を見たと思っても、べつに不自然ではない。それにしてもこの犬が倦きもせずに一つ動作をくりかえしているしつこさはどうであろう。犬の習性にうとい私は、あれは皮膚がかゆいせいか、それとも犬にも文化意識があってあれはあれなりの遊戯なのか、よくわからない。すでに塘のすすきの穂が白くはじけてしまっている季節なのに、犬の背中がすべり落ちてゆくその跡だけが新鮮な野菜のようにあおあおしていて、奇妙な感じがした。人間も犬もいま吹いている風も自然の一表現という点では寸分かわらないということを知ったのは大乗仏教であったが、空海はさらにぬけ出し、密教という非釈迦的な世界を確立した。密教は釈迦の思想を包摂しはしているが、しかし他の仏教のように釈迦を教祖とすることはしなかった。大日という宇宙の原理に人間のかたちをあたえてそれを教祖としているのである。そしてその原理に参加——法によって——しさえすれば風になることも犬になることも、まして生きたまま原理そのものに——愛欲の情念ぐるみに——なることもできるという可能性を断定し、空海はこのおどろくべき体系によってかれの同時代人を驚倒させた。峠のくだり道は空海の故地にちかづいている。もし犬を見て

いる私が犬に愛欲を感じても犬はよろこんで私の抽象化された愛欲のために子宮に化ってくれるかもしれないという密教に似た妄想あるいは密教そのものの想像をつい覚えるのも、この峠がそうさせる気分かもしれなかった。

池の情景に触れた。ついでに別の池を連想して、そのはなしをつづける。

空海が、讃岐の真野の地で荒れていた古池を築きなおして満濃池という、ほとんど湖ともいうべき当時の日本で最大の池をつくる工事の監督をしたことは、諸記録でうたがいを容れにくい。

その満濃池が、いまも野をうるおしている。われわれはこの旧官道をそのまま西へゆく。そして空海の生地を目の前に見つつ、左へ折れると、やがて山地になる。讃岐には千メートルを越す山はないが、この山地はこの国にすればわりあい高く、六百、七百、八百メートルという峰がなだらかに並んでいて、そのふもとの二百メートルぐらいの高さに満濃池が水をたたえている。池は三方を山でかこまれて浸蝕谷をなしているが、北だけはかつては野の方向にむかって開口していたのを空海が堰堤を築いて水をせきとめ、池にした。

その堰堤の上に立つと、「池とはいはじ海原の八十嶋かけて見る心地せり」という古歌も大げさでなく、まわりに人家がないせいか、池の面にさざ波がたつのさえ気味わるいほどにしずかである。いまの堰堤は昭和二十八年に改修された。堰堤はいまのそれもそうだが、空海が築いたときも池にむかって弧をなすかたちにつくられ、それによってぼう大な水圧に堪えるようにできて

いた。

この池は、ごくざっとしたかたちとしては空海以前からあったであろう。その証拠に、弘仁九年（八一八）にこの池が決潰し、北方一面の田畑や人家が流失したという事実で想像がつく。国司はこれを改修しようとして三ヵ年間工事をしつづけたが、雨季になるとそのつど崩れた。住民はたまりかねて、京にいる空海をまねいて築池使に任命してくれと国司に請願した。国司はそれを京に歎願した。そのときの「……空海ヲ万農池ヲ築ク別当ニ宛テンコトヲ請フノ状」によると、筆者である地方長官はその文章の中で空海を礼讃し、

「百姓恋ヒ慕フコト父母ノ如シ」

とある。空海は入唐までは無名の僧であった。ながく私度僧のまま居て、官に登録されていなかったせいもあり、おそらく官寺の僧侶のあいだでさえほとんどその名が知られていなかったのではないか。しかし入唐して、帰朝してのちは空海をとりまく事情は一変した。すでに長安に渡来していたインドのもっともあたらしい宗教である密教が、かれによって根こそぎ日本にもたらされた。その渡来の異様な思想をかれ自身が独自なものとして体系化し、さらにはそれ以外の異能をあらわしたりして、この築池にまねかれるころにはその盛名をきかぬ者はないほどにまでなっていたのである。

ここであらためて目をみはる必要があるのは、満濃池が、かれの故郷の池であることである。

かれは京にはいたが当然その決潰による水害も知っていたろうし、そのあとの改修工事で国司以下が四苦八苦していることも知っていた。当時、かれの京における身辺には同族出身の者が、官人や僧になっていて接触が濃厚だったから、かれらを通しても、池の様子は知ることができた。さらには実家には佐伯氏のあとを継いでいる長兄の鈴伎麿もいたから、決潰の様子などはくわしくしらせてきたであろう。長兄はじかに京へのぼってきたかもしれない。

「ああ、あの築堤なら私にできるだろう」

と、空海はかれらの前でつぶやいて、かれらをこ躍りさせたかもしれない。

――だから、ぶらりと行ってやろう。

とは、空海はいわなかった。空海のずるいところであり、もし空海が大山師とすれば、日本史上類のない大山師にちがいないという側面が、このあたりにも仄見えるようでもある。

すこし、満濃池の地形の印象をのべておく。

池畔を一周すると、浸蝕谷だけに形状が複雑で、地図でみれば掌のような形状の岬がいくつも池心にむかってつき出ており、ぜんたいのまわりが二十キロもある。まわりの三十六の谷々から水が落ちて池の水は涸れることがないところからみて、上古以来、自然の貯水がおこなわれていたのであろう。ただ雨がふると水が汪々とふくれあがってどっと下の野に落ちるために、この池の下の野をひらいてきた水稲農民たちはこの水をありがたがりつつも、雨季になれば逆に自分た

ちの生活を根こそぎに流してしまう兇暴な力としてたえずおびえておらねばならなかった。そのくせ一面、この池は季節になると池畔のいたるところにおそろしいほどの量の螢をわかせ、夜の池を夢幻のようにいろどるのである。この池が、密教でいう能動の世界である金剛界と変容の世界である胎蔵界のふたつをあわせもつという、空海が感得した自然の秘奥を知るための妙材料であるようである。空海は幼少のころこの山中の池まで何度も遊びにきたはずであり、池畔の一木一草までなじみのふかいものであったにちがいない。

堰堤は、さきにふれたようにアーチ型である。空海が、堰堤が水圧に堪えるためにはこのかたちでなければならぬと考えついたといわれている。その堰堤の上に立って池をみず、池の水を背にして北方の野をみると、樹間をとおし、足もとのはるか下に野がひろがっている。

さきに、目をみはる必要があるとのべた。ということは、この野はことごとく空海の実家の佐伯氏の勢力下の野であるということなのである。この巨大な池の水は、アーチ型の築堤の下をくぐって奔り流れ、なんと三千六百町歩の広大な田園をうるおすというが、この池の水はすべて佐伯氏の勢力下の多度郡の野をうるおし、それ以外の土地には地勢上行かない。満濃池の築堤は、池を掘ることが日本国の栄えのためという大げさな名目がありこそすれ、実際にこの池でうるおうのは佐伯氏の勢力の野で、佐伯氏はこれによって律令体制という土地公有制度のもとにあっての土地私有の抜けみちのひとつである墾田をいくつかひらくことができるのである。といって空海は佐伯氏の私利のためというのが動機でこれを築いたのではないであろう。空海の思想には

「貧しいものには物をあたえよ、富める者には法をあたえよ」という、それまでの――煩悩から解脱することだけを目的とした釈迦仏教――にはない思想があったが、この築堤の場合のように、物質的世界のことでこまっている者にはとりあえず法よりも利をあたえるという思想上の使命もあった。それがたまたま佐伯氏とその影響下の農民であったにすぎない。しかし気持を冷たくしてこれを考えると、動機はどうであれ、空海は讃岐における佐伯氏影響下の小天地に大利をあたえて満天下の感謝するところになったのである。

空海の食えぬところは、そういうところにもある。また他のところにもある。この築堤に乗りだすにあたって、かれは一笠一杖で出かけることなく、中央や地方の官人を奔走させることによって勅命のかたちをとらせたことである。かつまた僧でありながら、池を掘るについて国家的資格をもつ俗世の長官（別当）として出かけてゆくところにもあった。ついでながら後半期の空海ほど、日本国という、大唐帝国からみればちっぽけなこの国を、長安帰りのかれはそれがいかに小さい国であるかを肉体的実感で十分認識しつつ、知った上で国家そのものを追い使った男もまれであるかもしれない。すでに普遍的世界を知ってしまった空海には、それが日本であれ唐であれ、国家というものは指の腹にのせるほどにちっぽけな存在になってしまっていた。かれにとって国家は使用すべきものであり、追い使うべきものであった。日本史の規模からみてこのような男は空海以外にいないのではないか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com